

## 社会福祉士養成におけるグループワーク演習

— 越谷市役所との連携によるアクティブ・ラーニング —

### A Case Study on Group Work Seminars for Training Certificated Social Workers

— Active Learning in collaboration with Koshigaya City —

西川 ハンナ\*

Hanna NISHIKAWA

**要旨：**本稿の目的は、社会福祉士養成に期待される実践力の形成について越谷市役所とコラボレーションを行った「グループワーク演習」を例に検討する。演習はグループ間におこるダイナミクスを体験することを目的に越谷市「住まいの情報館」を会場とした市民の交流を図る『文教大学生と行く！一日バスツアー』をグループで企画・実施することを内容とした。学生は、12の施設や機関と連携をとりながら、市内の特産物や公的機関等を活用し6つのバスツアーを企画実施した。終了後のアンケートから学生は、授業の目的を十分理解し、グループダイナミクスを自ら感じ、メンバーと協力し合った成果に達成感を持っていることが分かった。実践力の形成には、実習後の専門演習において、より現実的な状況下（地域）で学習の総体となるような技術や知識の「総合的な力の出力」を目指す構成内容が、必要である。

**キーワード：**社会福祉士、グループワーク演習、地方行政とのコラボレーション  
アクティブ・ラーニング、総合的な力の出力

### はじめに

国家資格である社会福祉士の実践力を高めるために、その養成教育における相談援助演習（以下、演習）の意義も高まっている。演習時間は長期化し内容も、「相談援助演習のための教育ガイドライン（案）」<sup>1</sup>が示された。2013年12月には日本ソーシャルワーク学会学会誌でも、「ソーシャルワークにおける演習教育と専門性」と題して特集<sup>2</sup>が組まれた、このように演習教育の関心が高まっている。ソーシャルワーク演習教育とは、「ソーシャルワークに関する理論・方法・技術・価値の諸体系とソーシャルワークの実践体系との交互連鎖現象について実証することを目

\*にしかわ はんな 西武文理大学

的・目標として、教育者と学生が行う協働作業」であると日本ソーシャルワーク学会演習部会モデル（2010）で規定されている<sup>3</sup>。この規定で、演習教育は教育者だけの努力ではなく、学習者の関わりも問われているところに、筆者は注目する。学習効果を上げるには学習者の参加態度や意識も重要である。そしてその為の研究報告や学術論文等文献はあまり見られず<sup>4</sup> 研究の余地がある。

学習の手法について、近年様々な方法が提供されている。アメリカの高等教育界では、パラダイムシフトが生起し、大学は「教育の提供」から「学習の創発」へ、教員の役割は「知識伝達の専門家」から「学習環境のデザイナー」へとシフトしている<sup>5</sup>。日本の大学でも、サービス・ラーニング、プロジェクト・ベースド・ラーニングといった大学の内外の体験をとり入れた経験学習型教育が広がり、社会福祉士養成における演習授業<sup>6,7</sup> や実践家研修<sup>8</sup> にも導入されている。このような学習方法は「アクティブ・ラーニング」と呼ばれる。アクティブ・ラーニングは明確な定義はまだないものの「学習者自身が学習に責任を持つことを重視した複数の教授モデルを表す包括的用語（umbrella term）として用いられている」<sup>9</sup>。そこで演習プログラムにおいても、学習者の積極的な関わりと責任をもつ「仕掛け」と「方法」をデザインすることが求められる。社会福祉士養成で目指す「実践」的という場合二つの意味がある。一つは社会福祉の課題解決に応じられるレベル、いうなれば即戦力。そして、もう一つは社会福祉実践を想定した状況における専門的な技術と知識の「総合的な活用」である。社会福祉士が問題対応に臨む際、個人のスキルだけで問題は解決できない。特に、地域を基盤とした社会福祉の相談援助は、『課題別対応による実践』から『地域割による実践』への移行であり、『点（個）』への援助から『点を含めた面（地域）』への援助への転換<sup>10</sup> となる。そのような転換がなされる今、地域の問題を解決するには多職種との連携が必要になる。今後の地域を基盤とした社会福祉実践を見据えると演習においても「地域」「チームアプローチ」は取り組むべき内容である。そのようなプログラム展開を考える時、ソーシャル・グループワーク（以下グループワーク）の学習は、今後更に注目すべきである。実践的な学習環境を提供するには、実際の地域での学習方法があげられる。近年、大学と地方行政機関との包括的協定の締結は盛んであるが、社会福祉士の養成においても、行政機関との連携は双方にとって有益な結果をもたらすはずである。

そこで本稿では、実践力を高める演習にプログラムについて文教大学「グループワーク演習」における越谷市役所とのコラボレーションを例に考察する。

## 1. グループワークの意義

相談援助技術の学習においてグループワークの比重は多くはない、その軽視を危惧する声もある。川村は「ソーシャルワークは、人々へのエンパワメントと社会正義の実現を目指している。そのためには、未来のソーシャルワーカーになり得る学生たちに、グループワークの原則を効果的に教授することが重要である。特に、人間同士が競争し、傷つけ合い、分断、排除されてしまう現代にあって、もう一度人間の尊厳を認め合い、相互にかかわりを持ち、強さと弱さを担い、目標を共有し、協働していく経験を意図的にもたらすこと、そこからグループダイナミクスを体感するという学びを避けて通ることはできない。グループワークを再考することは、パターンリズムを排除し、当事者主体を取り戻し、人々に力をもたらすこと、つまりソーシャルワークとは

本来、何であったか、その本質を再考することでもある。<sup>11)</sup>と、述べる。グループワークを演習で体験することは、社会福祉士の倫理綱領で謳う価値原則を帰納的に学習することでもある。

## 2. 越谷市との連携

越谷市は、埼玉県の南東部に位置し人口は、331,565人、世帯数は140,703世帯（2014年1月）で、埼玉県内では人口6番目にあたる中核的な市である。首都圏近郊のベッドタウンとして緩やかな人口増加がみられ2008年にはアジア最大級のショッピングモール「イオンレイクタウン」オープンしている。65歳以上の人口割合は約20.4%である（2013年4月）。市内には文教大学と埼玉県立大学が立地する。福祉人材の養成には地域の福祉施設や相談機関との協力が欠かせず、大学と市役所の連携も多様な形で図ってきた。越谷市地域福祉計画の立案では、文教大学の教員が関わり<sup>12)</sup>、策定後も地域福祉推進委員会やワーキンググループへの教員や学生の参加、協働活動を行ってきた経緯がある<sup>13,14)</sup>。

越谷市住まいの情報館は、1995年の阪神・淡路大震災を契機として市民防災意識の高揚等を図り、耐震性・耐久性・環境共生（省エネルギー）に優れ、かつ高齢者等にもやさしい住宅の情報提供を視覚的あるいは体験的に行うことを目的に1999年10月に開館した。施設概要は、木造2階建て、建築面積120.59㎡延床面積210.09㎡。この施設の利活用として、現在二階で子育てサロンを月・水・金に10時から3時までで行っている。建築住宅課の御厚意により、授業での使用の許可を得た。なお、会場のアクセスの関係で市役所のバスの使用も可能となった。

## 3. 「グループワーク演習」

### (1) 演習目的と内容

本演習は「グループの課題達成に至る各工程で生じるダイナミクスを体験する」ことを目的に、『住いの情報館』を会場に、そのPRと市民同士の交流を図る市内一日バスツアー（親子対象・成人対象）の立案と実施」ことをその内容とした。対象は、社会福祉士受験資格取得を目指す4年生。2年次のコミュニケーション演習、3年次のケースワーク演習、ケース・スタディ演習を経て、履修する。4年生は、就職活動、卒業論文のための調査等各自並行して行うことになるので「フェアな仕事分担」、効率の良い作業、必要に応じたグループ内の「自己開示」や「交渉」といった「社会で必要となる力」の発揮も意図していることも伝えた。

### (2) 本演習の工程と実施

演習の工程は表1の通りである。まず2人組み（一部3人組み）を編成しバスツアーの原案を作成した。2人組みとバスツアーの対象（親子か成人か）は学生の希望と関係なくくじ引きにより決定した。合計20企画を作成し、プレゼンテーション（募集チラシやパワーポイントの作成、一部のパフォーマンス）を行った後、学生が「参加者が集まり、実現可能だと思うバスツアー」を投票で6つ決定した。決定後、6つのグループ（6～7人）を編成した。企画は投票時決定したものを改善し、実施した全ツアーは表2の通りで12施設・機関の協力を得た。決定した企画を基に、より参加者が集まるように、越谷市内の名所や人気の施設をバスツアーに組み入れ（表

3)。教室での模擬実施の際は、他の学生を親子や成人（主に高齢者）に見立てて、バスツアーの行程の不安な部分を実際行った。バスツアーの実施（図1・2・3・4）時は、数名の次回バスツアー企画メンバーが同行し手伝った。事前参加をすることでバス移動時間の活用や、プログラムの微調整等を図ったり、市民への対応を事前に学んだ。「住まいの情報館」での概要説明、耐震判断のPR、公民館の予約、バスの調整、広報への掲載、越谷市シティーメールでの呼びかけは建築住宅課の「バスツアー」担当者に調整いただいた。募集窓口は建築住宅課とし、参加者の個人情報管理、連絡は全て教員が担当した。

表1 演習授業の工程

1.	演習内容のガイダンス 企画案作成グループ（2～3人）の編成	市民参加ツアーの企画を通しグループワークを学ぶことを理解する。昨年度の活動記録からイメージを膨らませる。
2.	企画案の報告・企画の決定・企画グループの編成（6～8人）・役割・段取りの確認	企画案を投票により決定、企画者を中心にグループの再編成、今後の役割・段取りを確認
3.	作業	利用施設の下見・見学先の交渉・利用物品の作成等
4.	模擬実施（メンバー以外の学生を対象者に見立てて、模擬を行う）	実施に向けて、不安な箇所や工程など確認したい場面を60分実施し、教員・他のグループから助言をもらう
5.	改善作業	模擬実施により必要と思われる場所の改善
6.	一日バスツアーの実施	実施後参加者からの感想をもらい、反省、評価を行う
7.	全グループの報告会	パワーポイントによる各グループ（20分）の報告
8.	レポート提出・授業評価の実施	（レポート内容）各グループ活動において自分が貢献したこと、体験から学んだこと1600字。

表2 バスツアーの概要と協力機関

バスツアーのタイトル	対象者 概要 参加料（保険料別途）	協力機関・組織等
平成25年7月16日（火） 13:00～16:30 初心者のためのデジカメ・ アルバムデザイン講座	成人。住宅の耐震診断やバリアフリーの機器説明（以下、全回同様）日頃聞けないデジカメの役立つ機能と写真の整理をミニアルバムの作成とともに実施（実費500円）	越谷市建築住宅課 越谷市社会福祉協議会
平成25年7月17日（水） 13:00～16:30 誰でもできるアロマ体験	成人。アロマの効能の説明とルームフレッシュナー作り、ハンドマッサージの方法を学ぶ。（実費500円）	越谷市建築住宅課 増林地区センター 越谷市社会福祉協議会

バスツアーのタイトル	対象者 概要 参加料(保険料別途)	協力機関・組織等
平成 25 年 7 月 19 日 (金) 10:00 ~ 16:00 2 度目の青春いかがですか? 1 日文教生体験	成人。文教大学の見学、日頃の学生の学びを報告し、学生食堂体験の後、市民と学食メニューを考える作業を行った。	越谷市建築住宅課 越谷市社会福祉協議会 文教大学 文教大学学生食堂
平成 25 年 7 月 19 日 (水) 12:00 ~ 17:00 ママ会! 親子で文教生	未就学児親子。文教大学の見学の後、図書館での本の読み聞かせや子供がダンボールハウスで遊んでいる間に育児の意見交換を行った。	越谷市建築住宅課 越谷市社会福祉協議会 文教大学 大学図書館
文教大学学食 平成 25 年 7 月 23 日 (火) 10:00 ~ 16:00 知って、学んで、食べよう! これで君も越谷名産品博士	小学生親子。市内の名産・特産品に関する場所や、ごみ処理センター展望台より田んぼアートを見学、越谷のマスコット「コバトン」との撮影や越谷クイズを楽しんだ。	越谷市建築住宅課 産業支援課 越谷だるま組合 越谷田んぼアート実行委員会 東埼玉環境組合 越谷市社会福祉協議会 越谷市商工会 新方地区センター
平成 25 年 7 月 31 日 (水) 10:00 ~ 16:00 君が越谷を守る!! 夏の防災親子体験ツアー	小学生親子。震災時の対応や非常食の作り方、試食。消防署で煙中体験・防火衣・地震体験車の体験や消防士の働きについて親子で学んだ。	越谷市建築住宅課 危機管理課 新方地区センター 消防署 越谷市社会福祉協議会

表 3 「知って、学んで、食べよう!これで君も越谷名産品博士」ツアーの行程

10 時	越谷市役所出発 JA 越谷市ファーマーズマーケット 「グリーンマルシェ」(車窓より見学)	12 時 50 分	公民館「なのはな」 「ガーヤちゃん」の着ぐるみによる お出迎え
10 時 30 分	ごみ処理場「リユース」 展望台から田んぼアートの説明 (田んぼアート実行委員の方) から 説明を受	13 時 50 分	「住まいの情報館」見学 越谷名産品かるた等
11 時 30 分	しらこぼとパン工房 (障害者就労訓練施設) 見学・買い物	15 時 10 分	越谷博士認定式
11 時 55 分	「荻野だるま製作所」見学	15 時 25 分	住いの情報館出発
		16 時	越谷市役所到着 解散



図1 住いの情報館での館内説明



図2 大学内見学の様子



図3 住まいの情報館でのクイズ



図4 リユース展望台

### (3) 活動の報告

バスツアー実施後は反省会を行い、授業でグループごと当日までの工程、当日の展開、プログラムの評価、課題をまとめて報告をした。その報告例は資料1の通りである<sup>15</sup>。

### (4) 授業の評価

#### i) 参加者の感想

全バスツアーの定員は72名。参加者にも概ね好評であった。別ツアーへのリピーターが7名。感謝の手紙も頂いた。参加者の感想は「友達ができた」「(高齢者には行く場所がない)今日は楽しかった」「家族では(何度も)教えてもらえないところを丁寧に教えてもらった」「越谷で生まれ育ったのに(見学施設を)見たことがなかった」「大学の中に一度は行ってみたいかった」など、学生の企画が市民のニーズを捉えていたことを確認できるコメントをいただいた。

## 資料1 グループ報告会資料

### デジタルカメラ・アルバム作成講座 概要報告

【ねらい】

- ①たった一度の講座で、学んだ知識を今後の生活にも活かすことができる。
- ②地域の人々同士、または地域の人々と学生との交流がしやすい内容にする。

【プログラム概要】

- ・デジタルカメラの操作方法や知識の講座
- ・アルバムのデザイン講座

### 工程 一模擬一

2013/06/06 - 06/07

市内での模擬  
授業の模擬に  
臨んだ

市内での模擬授業の様子

市内での模擬授業の様子

### 工程 一反省と会場下見一

2013/06/08 - 07/12

（反省の内容）

- ・人数配置場所の見直し
- ・持ち帰り材料の検討
- ・当日の流れの確認
- ・参加者動線方法の検討

「模擬終了後、1ヶ月間の活動」

- ・発表内容や方法の見直し、調整調整
- ・立会を作成し、公開講座や講座で配布
- ・会場の下見 など

会場下見の様子

### 工程 一本番・バス内と会場一

2013/07/16 - 13:00-

「バス内でメンバーの自己紹介と  
本日の講座のアナウンス」  
終了し、本会場での活動です。

「予定どおりの情報配  
置の経過。2次の会場へ」

いよいよ講座が  
始まります！！

### グループプロセスの評価

- ・役割分担&相互フォロー
- ・時間を割き、直接会って話し合い
- ・ツールをフルに活用し、すぐに情報共有
- ・リハーサルを複数回行う
- ・宣伝活動のスピード（チラシ作成から配布まで）
- ・授業やゼミなど、今までの経験を生かす
- ・自前の物・もらい物の収集と活用
- ・現場下見（6人中4人が情報館へ）
- ・様々なトラブルを想定したリスクマネジメント  
&迅速な対応（x）名札や写真の準備の用意

### まとめ・感想

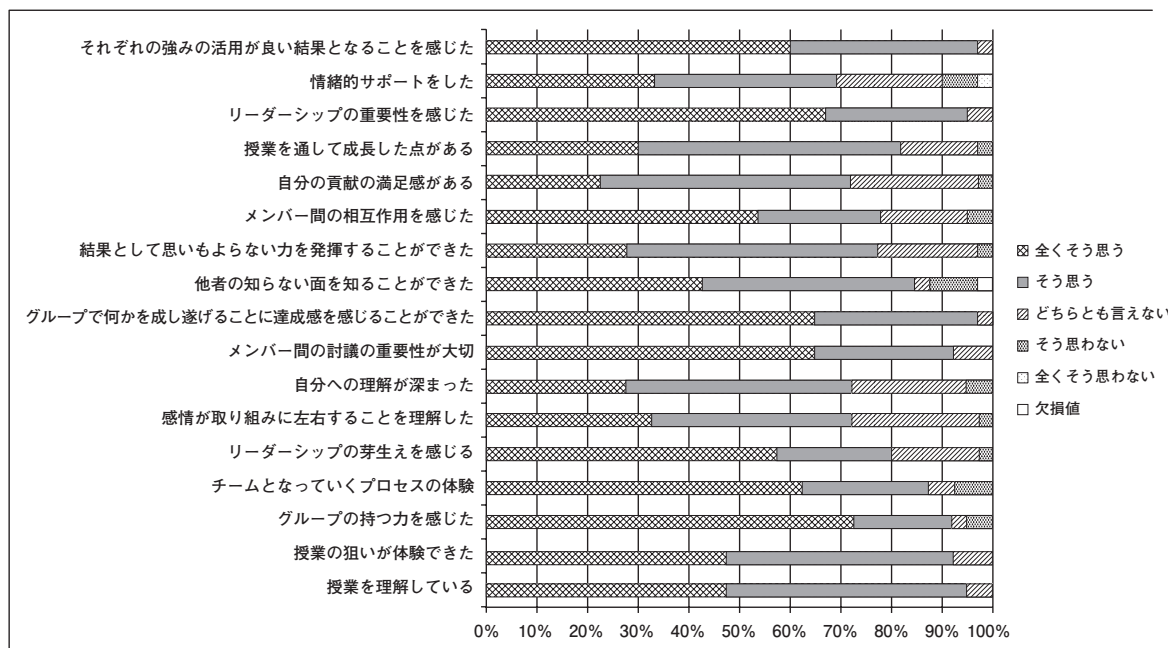
- 模擬を何度も行ったので、自信をもって本番に臨むことができた。
- ただ話をするならば誰でも出来るが、情報の発信者としてはもっと磨きをかけなくてはいけない。
- 会話が一方通行になることがあり、タイミング等の配慮に欠けていた時もあったと感じた。
- 「教える」というよりも、一緒に楽しみながらこの企画に取り組むことが出来た。
- 熟年者の方々から日頃の想いを直接聞けてよかった。本当のニーズはカメラの知識の学習ではなく、親身になって話を聞いてくれる相手ではないかと思った。

## ii) 学生の授業評価

授業における目的が十分理解され、ねらい通りの学習体験となったのか授業の最終日にアンケート調査を行った。調査票は無記名で記述内容は成績に無関係であることを伝え、指定した封筒に自ら入れてもらう形で回収した。受講生 41 名、当日参加者 40 名。返却されたアンケート用紙は 40 枚、回収率 100% であった。質問項目は 17 項目で「全くそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「そう思わない」「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねた。自由記載で「良かったこと」「大変だったこと」を尋ねた。結果は表 4 の通りである。「全くそう思う」が多かったものは、「グループ体験により『グループが持つ力』を感じる事ができた。29 (72.5%)」「リーダーシップの重要性を感じた 27 (67.5%)」「メンバー間で討議を行い、関係を修正・強化・とりなし・和解をすることは大切だと思った 26 (65%)」「グループで何かを成し遂げること達成感を感じる事ができた 26 (65%)」。「全くそう思う」「そう思う」の合計が多かった上位の項目は「人はそれぞれの強みがあり、それが活かされるとよい成果になるといったことを感じる場面があった 39 (97.5%)」「この授業の意図（自らグループ体験をしてそのダイナミクスを体験する）を理解している 38 (95%)」が先ほどの上位 3 項目以外にあげられる。それ以外にも「本授業ではまさに意図した（授業のねらい）が体験できた 37 (92.5%)」などの項目も 9 割以上の学生がマスターの企画の意図を十分理解し、グループの力や効果を体感していることが分かる。

自由記載では、良かったこととして「メンバーの良い所を知れた」「当日成功し、達成感、満足感を得られた」「自分ができることを活かして、協力出来たこと」「グループで協力することで、一人では達成することが不可能な企画を達成することができたこと」「各々が主体となって活動することができたこと」「イベントの企画だけでなく実践までさせていただいて、地域の方々と実際交流できやりの良かった。」「広報活動・他機関との連絡、グループ間でのやり取りなど今後社会に出てから必要なスキルを身につけることができた」「メンバー皆で一丸となって

表 4 授業後アンケートの結果





取り組み、想いが形になったイベントに感動した」「グループワークの力を感じられた」「チーム力があがった」(原文のまま)といった積極的な取り組みや達成感についての意見が多かった。大変だったこととしては「積極的でない人をとり入れること」「細かな点の準備をすること」「初めてのグループ企画だったので、自分をグループメンバーとして機能させること」「チームが一体になるのに時間がかかった」「ツアーを企画することがこんなに大変な事とは知りませんでした」「細かな工程を作成することに苦労した」等、本授業でのねらいをあげていた。

#### 4. 考 察

本「グループワーク演習」の展開と学生の授業後アンケート結果から実践力形成に効果的な「演習」に必要な要素を考察する。

##### (1) 地域をフィールドにする現実味の付加

社会福祉士には、「地域の福祉課題の把握や社会資源の調整・開発、ネットワークの形成を図るなど、地域福祉の増進に働きかける役割等<sup>16)</sup>」が期待されている。地域をフィールドに演習を展開して見えたことは、その現実味である。地域に出れば、市役所、社会福祉協議会、ボランティア団体、商工会等の既存の団体や個人の活動が幾重にも重なりながら展開している様子が露になってくる。学生が市民を対象とした企画をする際も、既存のサービスや団体の活動と歩みを合わせ、協力を得ていくのは、まさに社会福祉実践と同様である。現実社会には「福祉の専門家だけで展開する」問題解決ばかりではない。地域の中には住宅・防犯・防災・地域振興といった視点も欠かせず、更に多領域の専門職との連携を示す必要がある<sup>17)</sup>。

##### (2) 総合的な力の出力

専門家としての実践力を期待する際に、演習教育の場の活用を「多面的、多角的視点の醸成<sup>18)</sup>」から更に進めて、専門技術と知識の「総合的な力の出力」までもねらいとすることで、専門知識や技術の教授の場から、活用の場として実践的な力を高めることが可能である。総合的な学習について地域で展開する演習の条件を西川・森(2013)は、「地域において解決に値する福祉問題を課題に、専門職倫理を意識したグループ活動を通して、直接援助技術から間接的援助技術、関連援助技術までのあらゆる社会福祉援助技術を総合的に活用し、人間関係形成力を高める<sup>19)</sup>」として挙げたが、総合的な力の出力こそ実践で求められる力といえる。

##### (3) 肯定的グループ体験

学生は、サークル活動やアルバイトなど所属がある。しかし、最近はそれらに参加しない学生も少なくない、また、サークルは共通の価値や趣味のグループであり、アルバイトは概ねマニュアルに沿って仕事を展開する。本演習のようにランダムにメンバーを決め、役割を決定し企画を遂行するという経験は稀である。指導者としてのグループ体験の前に、社会福祉士がグループワークを実施する際、参加者として当事者の経験が前提として求められる。学生には教員が想像もしなかった自由な発想があり、自分自身の持っている力や資源を大いに活用し、協力し合った成果物を残した。そして、市民からの優しい見守りの態度と暖かな言葉は未来を担う若者達を大

いに勇気づけた。各バスツアーの成功は達成感となり、肯定的なグループ体験となった。「メンバーの能力に応じた参加」「葛藤解決の経験」「新しいさまざまな経験の機会」「援助者の自己活用」これらはグループワークの原則<sup>20</sup>であるが、このような経験を自らメンバーとして体験することが、社会福祉の理論の学習を腑に落ちるものへと深めた。

## おわりに

社会福祉士養成教育に不可欠な演習授業における、越谷市とのコラボレーション例を報告した。実践力の強化は、即戦力の強化だけを意味するのではなく、実践的な状況下チームのなかであらゆる社会福祉の知識と技術の「総合的な力を活用」できることも重要である。総合的な力の意味を「理解」するだけでなく、から学習内容の「出力」する事を目指す演習プログラムが必要である。学習の総体ともいえる実習後の専門演習においてグループ課題をチームで達成する経験は、社会福祉で学んだ理念を体験的に確認する工程にもなっている。先述の川村（2010）は「もし近い将来、学生たちが実践者として、効果的なグループワークを展開していくならば、ソーシャルワークは今よりさらに本質に近づいていくだろう<sup>21</sup>」と結んでいる。演習の効果を最大限引き出すには、そのための演習教育の環境デザイン・環境整備が求められる。本事例から実践力の向上を検討すると、地域をフィールドとして様々な団体や機関の胸を借り、より実践（リアル）的な状況で、学生が能動的な学習を展開することが理想といえる。今後は、さらに効果的な学習へと結び付ける体験と理論の融合を進めたい。

本演習の実現に際し、全面的な協力体制を組んでくださった越谷市建築住宅課のみなさまにお礼を申し上げます。

## 註

- 1 社団法人日本社会福祉士養成校協会 2013年4月 [http://www.jascsw.jp/pubcomme/20130402enshu\\_guideline\\_pubcomme.pdf](http://www.jascsw.jp/pubcomme/20130402enshu_guideline_pubcomme.pdf) (2014年1月20日確認)
- 2 「特集：ソーシャルワークにおける演習教育と専門性」『日本ソーシャルワーク学会誌』第27号日本ソーシャルワーク学会 (2013) 1-53
- 3 福山和女 (2013)「ソーシャルワーク教育における演習教育の実体」ソーシャルワーク学会誌第27号 1-16
- 4 石川久展 (2010)「ソーシャルワーカー養成と演習教育」ソーシャルワーク研究36号2 15-23
- 5 Barr,R.B&Tagg,J. (1955) "From Teaching to Learning A New paradigm for Undergraduate Education," Change : The Magazine of Higher Learning vol.27.Issu6 12-16
- 6 西川ハンナ・森恭子 (2013)「社会福祉士養成における総合型地域演習の在り方：東日本大震災における越谷市の被災体験に関するヒアリングを例として」文教大学生生活科学研究『生活科学研究』第35集 183-195
- 7 庄司明美・石原弥生 (2013)「ソーシャルワーク演習教育と地域行政課題のコラボレーションモデル」山口県立大学学術情報 第6号社会福祉学部紀要通巻第19号 76-76
- 8 西川ハンナ・尾形淳子・中島礼子 (2014)「社会福祉士を対象とした地域参加型研修～横浜支部のアクティブ・ラーニングの活用例～」『社会福祉士』21号 社団法人日本社会福祉士会 57-63
- 9 根本淳子・鈴木克明 (2008)「アクティブラーニングの動向調査」日本教育工学会第24回全国大会発表講演論文集 451-452

- 10 岩間伸之 (2011)「地域を基盤としたソーシャルワークの特質と機能―個と地域の一体的支援の展開に向けて―」相川書房『ソーシャルワーク研究』Vol.37No.1 4-19
- 11 川村隆彦 (2010)「グループワーク教授法の再考―学生主体の映画製作グループの試作―」日本社会福祉学会 第58回春季大会 (2010年3月27日東洋大学白山キャンパス) 報告要旨
- 12 森恭子 (2009)「地域福祉計画の策定方法について住民参加による福祉コミュニティへの接近を通して考える―越谷市のヒアリング調査事例を踏まえて―」文教大学生生活科学研究『生活科学研究』第31集 295-306
- 13 森恭子・西川ハンナ (2012)「地域福祉計画策定後における地域福祉の推進体制と方法―埼玉県越谷市の事例より―」文教大学生生活科学研究『生活科学研究』第34集 129-137
- 14 西川ハンナ・森恭子 (2013)「社会福祉士養成における総合型地域演習の在り方：東日本大震災における越谷市の被災体験に関するヒアリングを例として」文教大学生生活科学研究『生活科学研究』第35集 183-195
- 15 阿久津巴美・浅井大輔・岩瀬彩乃・古野間里穂・佐々木玲奈・鎌田あゆみ「デジタルカメラ・アルバム班グループワーク演習報告会資料」文教大学人間科学部 2013年8月「グループワーク演習」
- 16 「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」社会保障審議会福祉部会 平成18年12月12日
- 17 西川ハンナ (2014) 相談援助演習模擬授業「住まい・まちづくりを意識した演習」第15回福祉教育研修講座 平成26年1月12日 東洋大学白山キャンパス 資料 一般社団法人日本社会福祉教育学校連名 37-42
- 18 齋藤順子 (2013)「精神保健福祉士と演習教育」『日本ソーシャルワーク学会誌』第27号日本ソーシャルワーク学会 31-43
- 19 西川ハンナ・森恭子 (2013) 前掲論文
- 20 G. コノブカ著、前田ケイ訳 (1967)「ソーシャル・グループ・ワーク―援助の過程―」全国社会福祉協議会 231-236
- 21 川村隆彦 (2010) 前掲論文